

クオリア第9回

テーマ「無意味なものに意味がある～沈黙・同調・模倣とコミュニケーション」

吉川 左紀子（京都大学こころの未来研究センターセンター長）



様々な場面で人間的なコミュニケーション能力を高めることが求められていますが、コミュニケーションとは果たして何を言うのか？ コミュニケーションで意味あるものとは何か？ 様々な実例をもとに京都大学こころの未来研究センターの吉川左紀子センター長がスピーチします。

▽ 講演

京大のこころの未来研究センターで、コミュニケーションにかかわるいろいろな研究をしています。言いたいこと、伝えたいことを、端的にしっかりと無駄なく表現して伝える—これが効率のいい、よいコミュニケーションだ、というふうなことが私たちの頭の中にはあるように思うのですが、実際に調べてみると、どうもそうではないということがわかってきました。たとえば、会話の途中の黙っている時間というのは何も伝えていないから無駄な時間だとか、あるいは、相手の表情やしぐさに同調することは、相手と同じことをしているのだから、とくに意味がないように思えます。ところがそうしたあまり意味のないものの中に、実は、気持ちが通じ合うための大事な何かがありそうだと、いう、そういうことをこれからデータをお示ししながらお話したいと思います。

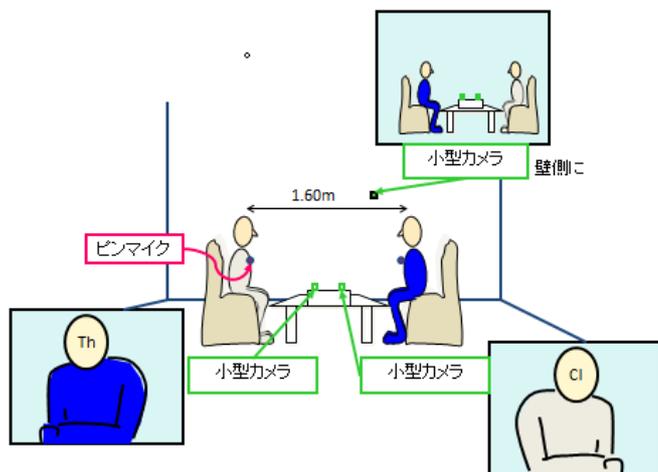
本題に入る前に、少し、自己紹介させていただきます。私は、認知心理学が専門で、顔の認識や表情の認識を中心とするコミュニケーションのことを調べています。私が現在所属しているこころの未来研究センターは、2007年に設立されて、脳科学、認知科学、臨床心理学、文化心理学、宗教学、倫理学など、いろいろな専門領域の先生方が集まって、学際研究をしています。キーワードは「こころ」なのですが、それ以外に「つなぐ」ということも、重要なキーワードになっています。この写真は、今のセンターのメンバーです。稲盛財団記念館という建物の2階にある、京都大学では一番小さい研究センターです。

キーワードは「つなぐ」、と言いましたが、センターでは「つなぐ」試みをいろいろやっています。まず、違う研究領域の間をつないだ研究を積極的にやろうと試みています。例えば、後でお話する「カウンセリングと実証科学」をつなぐとか、「心理学と脳科学」をつなぐとか、そういう違う研究分野の人たちが一緒になにか研究していく。それと、もう一つは、基礎研究を社会につなぐという試みをやっています。センターができてから、大学の外の人たちからセンターに対していろんな問い合わせがあります。それで始めた研究がいくつもあります。

最近、センターの研究プロジェクトとしてひとつまとまったのは、農業改良普及員の人たちの研究です。全国に地方公務員として7000人くらいいて、農家の人たちにいろんな知識を提供して、農業をより良くしよう、としている人たちです。この仕事は、人の心を動かすことと深いかわりがあるので、自分たちの仕事について心理学の眼で一度研究してもらえないかという依頼があって、社会心理学・文化心理学の観点から「社会資本としての農業改良普及」というテーマで研究を進め、最近本になりました。また、過去の知、伝統の知と現代をつなぐということで、昨年からは、ブータン仏教やブータンの伝統文化の研究も始めています。

それで、きょうのテーマに移りますが、最初のお話は、話を聞く専門家、つまりカウンセラーが話を聞くと、なぜ、クライアントの心を変えていくことができるのか、それを実験心理学の方法を使って調べてみたいということで始めた研究です。

普通、カウンセリングは、週に一度、50分から、1時間、カウンセラーとクライアント



の二人が向かい合って対話形式で行います。研究では、プロのカウンセラーが行う相談と、もう一つ、高校の先生に悩み相談の聞き役になっていただき、同じクライアントの悩みを聞く様子をそれぞれ、ご覧のようなセットの中でVTRに撮り、比較しました。実際のカウンセリングの収録はできないので、研究協力者の人に、友達の輪に入っていけない、対人・社会不安の持ち主で、大学も

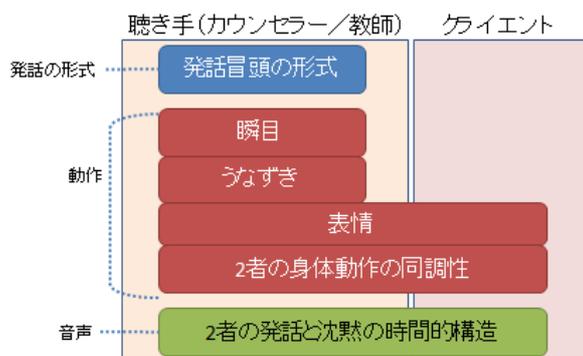
休みがち。その悩みを相談に来る大学生という設定でロールプレイをしてもらいました。

まず、カウンセラーとクライアントの大学生の間でどのようなやりとりがなされたかという

ことを、画面に出していますが、テキストに起こしてみています。

これは、黒い字が相談者で、赤い字が聞き手である高校の先生です。これ見て、すぐわかるのは、赤字が圧倒的に多い。つまり、聞き手であるはずの高校の先生がたくさん話しているんですね。いろんなアドバイスをしながら話を聞いている様子がわかります。相談者の方は、早

分析指標

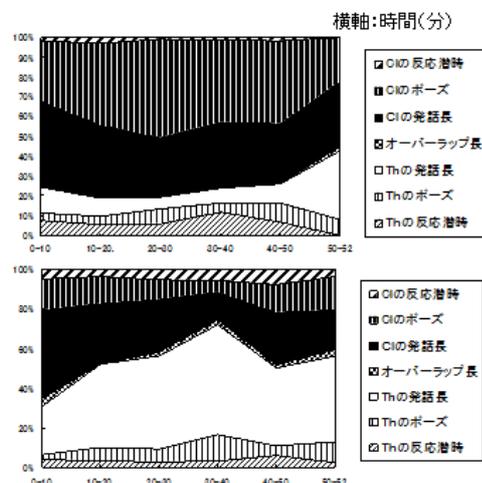


い段階から、相談するというよりも聴き手のアドバイスに返事をするだけ、という感じになってしまっていることがよくわかると思います。一方、専門のカウンセラーはどうでしょうか。出だしのところで言っていることは先生の悩み相談とほとんど変わらないんですけれども、赤い字の量が明らかに少ないということが見て取れると思います。つまりこちらは、相談者がずっとしゃべっているんですね。あと、もうひとつ気づいたのは、相談者が話をしている時に、その間に、沈黙が入ることでした。黙っている結構長い時間ある。4秒、10秒、12秒…、と、発話の合間の沈黙が非常に長い。普通、私たちは二人で向かい合ってやりとりをしている時に、相手が黙り込んでしまうという状況があったら、1秒、2秒は待つとしても、10、12秒もじっと相手が次に言葉をつないでいくのを待つことは、ほとんどないんじゃないかと思います。

最初に、聞き手のプロとしてのカウンセラーがどういう聞き方をするのかということを見てきた時、この沈黙時間がものすごく長いというのが、一番顕著に気がついたことでした。相談者は、ゆっくりゆっくり言葉を紡いでいくんですけども、プロのカウンセラーはそれを遮ることなく、ずっと待っている。これが、素人とは全く違う、プロの聞き方なんだとわかってきたわけです。

聴き手: 専門家

聴き手: 非専門家



こういう実験を重ねて、次に、発話の時間を測ってみました。横軸は時間軸で、ゼロから50分間の流れが見えるようにしています。どれぐらい沈黙があり、どれだけ話しているか、変化のパターンが分かります。下の図の、高校の先生の方は、時間が経つごとに、クライアントの話している時間が短くなり、話の間のポーズも短くなっています。逆に、聞き手である高校の先生がどんどん話していつていることがわかります。上のカウンセラーの方は反対ですね。特に、真ん中あたりの時間帯で、相談者の話す時間が増え、沈黙の時間も長くなっていることがわかります。このように、やりとりの内容ではなく、そのパターンを分析することで、プロの聞き方の特徴が見えてきました。

その次に、映像から、相談しているときの二人の体の動きの量を分析しました。二人のあいだの体の動きがどれだけ関係し合っているか、同調の具合を調べてみたんです。それを見ると、相談があまり深まらなかった高校の先生の方は、体の動きはうまく同調していない。それに比べ、プロのカウンセラーの方は、最初から体の動きが同調していて、中間から以降はさらに同調の程度が深まっています。

カウンセラーは、悩みを聞いてアドバイスをするとか、適切な答えを返すといった聞き方ではなくて、相談者が黙っている時間、沈黙の時間をうまくコミュニケーションの中で

使いながら、相談者の深い話を聞き出していることがわかってきました。それと、コミュニケーションは、単なることばのやりとりではなくて、身体を使ったやりとりなんですね。言葉がスムーズに出てくるとか、やりとりが素早くできるということではない。気持ちが通じ合っているとか、やりとりがしやすいとか、そういう気持ちになるには、体全体を使った共感というか、同調が重要なのではないかと、ということがこういう分析から見えてきました。話し手の専有時間とかポーズの長さ、話の深まりとの間にも関係があるようですので、こういった特徴が、質の高いカウンセリングのものさしになるのではないかと考えています。

こういうことを踏まえて、共同研究者といろいろ話しているんですが、人が本当に真剣に、自分の気持ちを相手に伝えようと思った時には、話し始めてすぐではなくて、大体、2、30分ぐらいかかるし、途中の沈黙も長くなるということです。2、30分して、初めて、自分の一番話したいこと、相手に伝えたいことが出てくる。それで、通常、1カウンセリングの時間が、45分から50分ぐらいに設定されていることも、意味があるのではないかと考えるわけですね。専門家の聞き方の特徴、特に、沈黙の時間が、コミュニケーションにとって重要だということなど、研究でわかってきたことを、学会で報告するんですが、こうした話をする、プロのコウンセラーの人たちにも喜ばれることが分かって安心しました。自分たちが普段やっていることが、目に見える形でわかってくるのは、とても面白いというわけです。

このほかにも、対話中の瞬きやあいづちの特徴などについても分析していきまして、聴き手のプロならではの特徴がいくつか明らかになってきています。今回の研究を通して、悩み相談とカウンセリングの聞き方にはずいぶんはっきりした違いがあることに驚きましたし、「沈黙の時間」のもつ意味を改めて考えることになりました。こういう研究をやってみますと、臨床心理学と実証科学の手法による行動分析という異なる方法論をもつ分野をつなぐことで生まれる、新しい研究領域があるように感じています。

2つめの話題は、「表情」認識のお話です。この研究テーマは、実験心理学と脳科学がつながって、今、少しずつ面白い展開になってきている領域です。表情を介した、同調や共感の研究です。今日は、研究の詳細は省きますが、脳の研究と、行動実験とがどんなふうにつながって、同調や共感の研究になったのか、そのあたりのお話をしたいと思います。心理学でも、脳科学者と共同して1990年くらいから、MRI（磁気共鳴画像法）という装置を使って、いろいろな課題を行っている時に人間の脳の活動がどうなっているかを調べることができるようになってきました。たとえば、いろんな表情を見ている時に、脳のどういうところが活性化するかということ調べてみるわけです。私たちも、こうした研究を少しずつ始めました。たとえば、真顔から笑顔や怒りの表情に変化する映像や、静止画の表情、ランダムパターンの動きなどを見ているときの脳活動をみてみると、表情を見ているときに活性化するのはどのあたりかが分かってきます。その中でとくに注目したのは、変化する表情を見ているときの、運動前野という、ミラーシステムがあると言われる

脳部位の活動です。

1990年代に、サルの中で見つかった「ミラーニューロン」という神経細胞があります。これは、サルが、ヒトや他のサルが物をつまむ動作をするのを見ている時に、自分がその動作をする時に活動するのと同じ脳部位が活動することが発見されて、鏡のような機能をするというので、ミラーニューロンと名付けられました。人の脳ではミラーニューロンシステムと呼ばれていて、運動前野と、下頭頂葉にあります。

変化する表情を見ている時にも、ミラーニューロンシステムのある部分が活性化することが分かったので、これは面白い、と。どうしてかという、運動前野は、動く準備をするときに活動するわけです。表情の変化を見ているときにミラーのように運動の準備がされるとしたら、それはどこの動きかという、見ている人の表情、ではないかと考えました。もしかすると、変化する表情を見ている人の表情にも、同調した表情の動きがみられるんじゃないかと考えました。ということで、それを調べる実験をやってみました。

この実験に使うのは、テレビ局で使われているプロンプターと同じものです。下のほうにモニターがついていて、モニターに映った映像がハーフミラーに反射してプロンプターの前に座っている人に見えるようになっています。後ろ側にはビデオカメラがセットされていて、モニターを見る人の顔を正面から映していますが、見ている人は撮られていることがわからない、という装置です。これを使って、モニターに映る表情映像を見ているときに、その人の表情がどう変わるかを録画して調べてみました。すると、ご覧いただいているように、モニターに映る人がまゆをしかめると、それを見ている人も、まゆをしかめます。また、相手がにっこり笑うと、見ている人の口角がふっと上がるなど、表情が同じように変化することがわかってきました。つまり、表情の動きを見ている人の表情が変化して、それは見ている表情と同じようになる。このことは、他人の感情を読み取ろうとする時に、自分自身の感情にシミュレートして理解するような、そういう「共感」の仕組みを私たちのこころは備えているんじゃないか、ということを示していると思います。共感、

というのは、相手の表情を自分の表情に敷きうつすような仕組みで成立している。しかも、この二人の間に生じる共感は、表情を介して、集団の中のほかのメンバーにも伝わるといことが大事だと思います。つぎに、実際に、二人の人の表情を直接撮影してみたらどうだろうと考えて実験をやってみました。その映像を見てください。ここに映っている二人は友達同士で、一人の方にはこういう表情をしてくださいと



Dynamic



Static



Mosaic

お願いしており、もうひとりの方には、相手の表情を見て、それがどういう表情で何を伝えたいか、紙に書いてください、と言ってあります。この受け手の人は、プロンプターで自分の表情を撮影されていることは知りません。見ていただいたように、受け手の人の表情は、送り手が作った表情に同調していますね。表情が同調するというのは、相手の気持ちと同じような気持ちになっているということを感じるシグナルになりますし、この様子を見て、二人の間でそういうやりとりが起こっていることを、周りの人たちもわかるのです。顔の表情が同調して共感が生まれる。そしてそれは二人の間だけにとどまらず、周りの人にもそれが伝わる仕組みがある。私たちはこうした同調、共感の仕組みを使ってコミュニケーションしているのです。

さて、最後のお話は、最近始めた「作業療法における専門家の技法」という研究です。京大病院の作業療法をやっておられる先生と共同で、現在、研究を進めています。発達障害の子どもさんの支援としての作業療法なんですけど、何が作業療法の効果を生み出しているのかを明らかにしたいと考えて研究を始めました。ビデオを用いた行動解析や、作業療法士の方と子どもさんとのやりとりの言葉を分析するという方法を使って調べていくことで、優れた作業療法が、どういう形で子どもたちを変えていけるのか、あるいは、優れたコミュニケーションの方法としてそれがどう機能しているのかを示せるのではないかと考えています。

現在行っているのは、作業療法士として24年の経験のある先生と、3年の作業療法の経験のある大学院生の人の、作業療法のやりかたの比較です。中学生の男の子を対象にした作業療法の映像をもとにいろいろな分析を行っています。ちょっと自閉的な傾向があって、長く作業療法を受けながら通常学級に通っている子どもさんです。実際の作業療法の場面をみてちょっとびっくりしたのですが、作業療法士と子どもが二人だけではなく、子どもが行う運動や遊びのサポートをするアシスタントの人がいたり、あるいは、お母さんも一緒にその場において、ずっと作業療法を見ています。ちょっと余談ですが、ビデオで撮った映像を見ながら、作業療法士の先生に、このときの発話はどういうつもりで言ったんですか、と聞くと、これはお母さんに対して、子どもは今こういう気持ちなんだ、ということ伝えるために言いましたとか、お母さんが不安そうな様子だったので、大丈夫だということ暗に伝えるために言いました、といわれるんですね。作業療法の場面をビデオで見ながら、発話の意図を聞いてみると、子どもに話しているようで、実はお母さんに伝えるために言っていることが、すごく多いということがわかってきました。作業療法士の先生は、子どもとやりとりをしていますけど、そのときに、同時にお母さんの存在にもしっかり注意を払っているんです。ビデオを見ていると、ああここで二人の間でこんな話が行なわれているなあ、とか、ああこういう場面なんだなと、簡単にわかったような気になるんですが、実は、そこで流れているところの動きというのはとても複雑で、そう簡単にはわからないんですね。

さて作業療法の様子をVTRで録画した後、作業療法士の人の言葉を全部記録して、分類するというのをやりました。そうすると、さまざまな機能を持った言葉を使って、子どもの行動を誘導していることがわかってきました。計画要求、疑問、実況中継のようなこと、合図、感動表出、雰囲気作りの言葉等々、作業療法士はいろんな言葉を使うんですね。子どもの行動をうまく引き出すように、自分の状況を知らせ、次には何をしたらいいか分かりやすくするとか、その場を和ませるなどいろんな言葉かけを行ってやっています。それで、どういう言葉をどれぐらいの数で行っているか分析して経験の豊富な熟達者と、非熟達者を比較しますと、熟練の作業療法士は、雰囲気作りの言葉を非常にたくさん使ってみたり、実況する言葉や、合図、感情表出の言葉もよく使っています。一方、非熟達者の方は何がが多いかという、ああしよう、こうしようという誘導や、子どもに対する問いかけがすごく多いことがわかってきました。

つまり、熟達者は、子どもにこれから何をしたいかを考えさせたり、それをサポートするように実況したり、合図をしたりする。これはお母さんを多分に意識した言葉かけでもあります。そして一連の運動や遊びが終わったら、振り返ったり、それに対する自分の感情を表現したり、その合間に、雰囲気作りのちょっと笑わせるような言葉を発したり、その場にいる人、全員が楽しめる雰囲気を、いろんな言葉をかけて作り出しているのです。

この研究はまだ始まったばかりですが、作業療法というのは、単に、子どもの運動機能を高めているだけではないんですね。作業療法士の人は、絶えず子どもとコミュニケーションをとりながら、子ども自身が自分の状態に意識を向ける力を高めるとか、あるいは、ほかの人との気持ちを伝え合って、情動的な関わりを促進するような言葉かけをしています。こうした作業療法士の人たちの持っているスキルは、実証的な分析を通して、教育場面一般に活用されるように広めていくことができるのではないかと考えています。

以上、三つのお話をしましたが、あらためて、これまでやってきた研究で分かってきたことをまとめると、カウンセラーや作業療法士といったコミュニケーションのプロフェッショナルは、相談者や障害児の自分のこころの表現を、一番いい形で引き出すコミュニケーションのスキルを持っているということでした。そのときのやりとりにとって大切なのが、沈黙であったり同調や模倣、そして共感といった要素なんです。これは、今まで何となく無駄のように思われていたり、あまり重要だと思われてこなかった要素です。しかし実はとても大事なものらしい、ということが少しずつ見えてきました。

繰り返しになりますが、人と人のコミュニケーションは、役に立つ情報をできるだけ効率的に伝達するという、そういう性質のものではない。そういうやりとりもあるかもしれないけれど、日常的なやり取り、あるいは、なにか問題を抱えた時に必要になるコミュニケーションでは、安心できる快適な場があって、その中で、同調してくれる他者、自分の心を受けとめてくれる他者がいて、ゆっくり時間をかけてやりとりする、こういうことがとても大切なんじゃないかということですね。そして、他者としっかり対面をし、身体全体を含むやり取りをすること。

最近の私たちのコミュニケーションでは、携帯やEメールでのやりとりが中心になっていて、対面することとか身体というものの重みが少しずつ失われてきています。私たちの研究結果が示すように、また、作業療法士やカウンセラーのお話を聞いていてもそうなのですが、こういう要素が、人間のこころを育て、こころの問題を解決するときにはとても大事であることがわかってきたように思います。こうした基礎研究の成果を、これからの専門家の教育や、日常のコミュニケーションの中にも生かしていけないかと考えています。

人は、一生の間、コミュニケーションをやめることはありません。そして、今、とてもコミュニケーションが難しくなっている状況があるとすれば、どこに問題があるか、なぜ難しくなっているかを調べて、どうすればよいかを考える必要があります。カウンセラーは対話というコミュニケーションによってクライアントのこころを変化させますし、作業療法士は身体を使ったコミュニケーションを通して、子供たちの生きる力を回復させる人たちです。このような、専門家の人たちの持っているスキルは、とても参考になると思っています。私たちの行っているコミュニケーション研究は、こうした専門家のスキルを具体的に取り出して、専門家でない人たちにとっても役立てられるようにする仕事と考えて、取り組んでいます。

クオリア第9回

テーマ「無意味なものに意味がある～沈黙・同調・模倣とコミュニケーション」

▽ 討議

ディスカッサント

堀場 雅夫（堀場製作所最高顧問）

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授）

山口 栄一（同志社大学大学院総合政策科学研究科教授）

吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター長）

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授）



大変興味深く、同時に身につまされる話でもありましたね。特に、最初の話はほんとうに考えさせられました。どうも、私たちはしゃべりすぎているんですね。これは、大学とか会社でみなさん日々体験していることではないでしょうか。私も、学生の話聞く時、どうやらこっちが話し過ぎているなあと感じることがあります。学生から話を聞く時、相手の話を聞いているつもりなのに、先生、ちょっと黙っていてももらえませんか、といわれることがままあるんですよ。きょうは、会社の中堅、上層部にいらっしゃるみなさんも、部下の話聞かなければいけないことが多いので、結構考えさせられるものがあつたんじゃないでしょうか。沈黙っていうものが交じる時、つい私たちはしゃべりすぎてしまう。実は、君のいいたいことはこういうことなんだろうと、先取りしていつてしまうんですね。一つ待ちを置いて沈黙を介して吐露されることは、実はその内容が重要であると同時に、お互いの気持ちを通じ合わせるのにもまた重要だということだったんですね。吉川さん、どうでしょうか。

吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター長）



ええ、そういうことです。結局、時間なんですね。どんどんせっかちな気持ちに世の中なっていってしまっていて、コミュニケーションを短い時間ですませたいという傾向にあり、価値観も、それが時間の節約でいいことだというふうになってきているんですね。沈黙の時間をゆっくり取って話を聞くってことが、なかなかできないようになってきている。特に、それは、弱い立場の人、大人と子どもでいうと子ども、上司と部下では部下、カウンセラーとクライアントならクライアントなんですが、その表現を聞き取る場合には、沈黙の時間はとても大事で、強い立場の人は、その沈黙の時間に対するトレランス、忍耐力を持っていることが必要なのですが…。

山極

相手が沈黙をしている時に、聞いている方はどういう表情、というか態度をしたらいいんでしょうねえ。イライラしている感じが見えてはいけないだろうし。

吉川

そうなんです。それは本当に身体的なコミュニケーションで、弱い立場の人というのは、上の立場の人が何もいわなくても、聞く姿勢があるかどうかを敏感に感じとるんですよ。もっと早くしゃべってほしいなと思っているなんてことは、すぐ伝わる。例えば、学生は、山極先生が「この忙しいのに」と思っていることは、すぐ感じとります。これは、ですが、その時ではなく、だいぶ経った後になって、あの時こうでしたね、なんていわれて、私も反省させられることがあります。

山極

時計を見たらいかん、といわれますね。これは、俺は時間がないんだよということを、あからさまに表現しているわけです。「あの時先生、何度も時計を見たでしょう」なんていわれた経験がある。

山口 栄一（同志社大学大学院総合政策学科教授）



ところで、カウンセラーのVTRで気になったのは、本職のカウンセラーの人が被験者にタメ口をきいていましたでしょう。あれを見て、ああ、これは多分、関西で撮られたものだなと思ったんですよ。それで、ずっと考えていて、関西文化圏と関東文化圏でコミュニケーションの仕方は違うな、と思ったんです。関西だと、タメ口は人と人の距離感を縮めるためのツールですが、関東だと、タメ口は上下関係を発生させるメッセージだから。

そこで突然思いついたのは、「探偵ナイトスクープ」という番組のことです。関西では視聴率が20%ほどもある人気番組なんですけど、関東では全く人気なくて、5%程度。けっきょくローカルテレビ局に追いやられてしまった。

これタメ口のちがいに似ています。私は実験が好きなので、いくつかビデオに撮って東京の友人に見せてみましたが、全くつまらないという。「土足で、こんなにズケズケ人のところに入って来てどういうつもりだ」と怒り出す始末。しかし、関西の人に聞くと、これは、基本的に関西の通常のある様だというわけです。

おそらく、コミュニケーションにおいて小さいころに培われた何かが、関西と関東で違うんじゃないか、と思いました。そういう研究ってあるんでしょうか。

吉川

コミュニケーションの地域差ということですね。具体的な研究例はすぐには思いつかないんですけども、かなり多くの心理学者が実はとても関心を持っていますね。作業療法も関東と関西とは違うんですよ。きょうお見せしたのは、典型的な関西のやり方だと先生はおっしゃっていましたし、学会でも、関東で見せる時と関西で見せる時には、見せ方を変えるということでした。だから、コミュニケーションを理解する時の枠組みが、地域によってかなり違うんですね。私自身、北海道で生まれたんですが、両親は関西なので、まあ、どちらも経験しているんですけども、何がコミュニケーションで大事かという、相手との距離の取り方なんです。それは、物理的な距離でもありますし、言葉による心理的な距離でもあります。だから、丁寧語から、そうじゃないため口が変わる、どういうタイミングで変えてもいいのか、その間の測り方、距離の測り方が、とてもコミュニケーションを心地よくするか、不愉快にするかの境目になると思います。恐らく、関西弁のもっているイントネーションとかが、結構近い距離でのやり取りを前提にしたコミュニケーションなんですねえ。だから、関東の人たちにとったら、異常に近いと感じて不愉快になるんでしょうし、関西の人が関東に行くと、ちょっと距離のある冷たいやり取りに感じてしまうんだと思います。

山口

なるほど。でも私は、ビデオのカウンセラーのタメ口が嫌でした。ちゃんと「ラポール」の形成ができてからタメ口を使ってほしい。「ラポール」ができる前にタメ口をきくと関東の間人は、いやがります。そんなこともあって、ビデオのタメ口がいやだなあと思ったんです。



吉川

うーん、あのやり取りを見て、タメ口のことをいわれたのは山口さんが初めてなんですよ。いつも周りにいる研究者の人たちは、関西の人が多いためあまり気づかれなかったと思うんですが…。山極さん、関東出身ですからいかがですか。

山極

もともと、馴れ馴れしいタイプの関東人ですから、あんまり感じたことはないですね。むしろ、いつも、人から敬されている立場の、堀場さんはどうお考えですか。人との距離を、逆に縮めようと努力されているんじゃないかと思うんですが。

堀場



タメ口って、「です、ます」のない、馴れ馴れしい話し方ってこと。「お前、何しとんねん」とか「なんや、それ」ってタメ口？ それあかんいうんやったら、関西では通じへんやんか。ぼくは、100%タメ口ですから。山口さん、まだ、そんな症状なら、相当関係は悪くなってるなあ…、とこれは冗談だけど。それで、先ほど、沈黙の話が出てましたが、ぼく、すぐ結論出す方なので、ある人から、90秒は相手の話を黙って聞けよと。これ、原稿用紙400字の分量なんですけど、それでいいということが伝わってこないのは、そいつはアホやからなんですな。最近、90秒聞いたなあとわかるようになってきた。それで、黙って聞いて、何いつているかわからなかったら「お前、何がいいたいんや！」と、タメ口で悪いですけど（笑い）、叱るんです。これ、人の我慢は、60秒ぐらい。それをあえて1.5倍にしているんであって、これで、自分のいいことが伝えられないようでは、我々の仕事はできません。私とこの会議なんですけど、最近、日本人よりアングロサクソンの方が増えてしまったんですが、彼らは、会議のスピーチで日本人がよくやる「前置き」をととても嫌がります。グローバルの商売で勝つていこうと思う時、人の話を沈黙で、何秒も聞いてるなんて人は、いない。こんななどないしたらいいの。そんなんしたら、あいつアホか、耳悪いんかといわれる。

吉川

ちょっと、先ほどの話と、ビジネスの場面とは違いますね。

山極

ただね、会話のつくり方が西洋と日本では多分違うことが大きいですね。日本語には主語がないとかいわれますが、文章書く場合、論文書く時は、西洋式にまず結論を先に書きます。これ、日本と全然違う。

堀場

日本は、その前にごちゃごちゃ書くね。沈黙も含め、グローバルの中では難しい。

山極

それで、吉川さんに聞きたいことがあるんですが、先ほどの「同調」ということなんです。顔を向かい合っていると、相手が笑えばこっちも笑うというように、自然に同調してしまうということだったんですが、これ人間に共通なことなんでしょうか。実は、アフリカの遊牧民を調査に行った人の話を聞いたんですけど、遊牧民に共通語で話しかけるんだが、全然笑ってくれない。こっちは、向こうが笑えばこっちも笑うということで親しくなろうとしても、遊牧民の人って絶対笑ってくれないんですって。これには、ものすごい

違和感をおぼえたらしい。それで思うのは、いうならば、同調というのは、文化によって習得するものなんだろうか。例えば、日本人だったら、相手としゃべっている時、ニコツとしたり、同調して相槌をうったりする。これは子どものころからの教育によって身につけていくものなのか、ちょっと教えてほしいんです。

吉川

出会う前に、どういう心の状態にあるかということと、ものすごく深く関係があるんですよね。遊牧民の人たちは、基本的に敵対するっていいですか、親しくならないということがデフォルトとしてあって、そして、自分の仲間として入れるって判断をしてから近い関係になると思うんです。ただ、全然違うのは、ブータンに行きますとね、向こうから道を歩いてくる人に、こっちが笑うと、すぐニコッと笑うんですよね。これには驚きました。私たちは日本人ですから、服装からしても違いますし、向こうから見たら、あんまり親しくできない人物と思われても仕方がないのに、大学生や子どもも大人でも、目が合えば笑うということをやりますよ。それで、日本に帰ってきてから、これは、どういう状態になったらできるのかを実験しようと思い、私の住んでいるマンションのエレベーターの中で、毎朝、いろんな人にあつた時、ニコリ笑える心持ちはどういうものなのかいろいろ調べてみたんですよ。そうすると、これから大学に行って仕事をしようという時には、笑うというモードにならないんです。それが、もっと別の何というか、ゆったりした、仕事モードではない時なら笑えるということがだいぶわかってきたので、ブータンの人たちは、まあ、祈りの国ともいわれるのですが、常にこういう状態に自分の心を整えているのかなあと。そんなわけで、遊牧民の人たちの「マインドセット」は、多分、基本的に、知らない人は敵である、というところから、出会いがスタートするんじゃないかというのが、私の想像です。

堀場

ぼくは昔の辻斬りやないですけど、「ニコリ笑ってバツサリ斬る」というのをやっているんです。例えば、社員が何かアホなこといいよるでしょう。その時、バカモンとすぐにはいわず、「君の気持ちもわからんでもないが」といってちょっとニヤっとしてから、「ナンセンスや」というんです。これいいですか、悪いですか。

吉川

ニコリ笑うというところで、その後、怒鳴られても、傷つかないと思いますね。



山極

論理の世界と感情の世界は違うんだということを表しているんですね。

堀場

ええことしてるんや。

山極

ええことというより、どうか、むしろ、うまいやり方なんですよ。感情的にも嫌なのでダメだ、というのが普通です。だけど、感情的にはいいと思っているけど、論理的にはダメだと…。

堀場

君の気持ちはわからないでもないけれど、そんなことできるかと、やるのがいい。

吉川

その、「君の気持ちはわからないではないけれども…」というところが、実はものすごく大事なんだと思います。それが、ニッコリ笑うってところで伝わるんでしょうね。

山極

人間にとって、「気持ちは全然わからないけど、でもいいよ」といわれる方がいいか、「気持ちはわかるが、ダメだよ」といわれる方がいいか。

堀場

「気持ちはわからへんけど、ええのんちゃうか」というのは、いわれたらそら、ショックやわね。人格無視や。

山極

吉川さんが今おっしゃったことで、とても大事と思ったんですが、文化、あるいは状況によって、人は表情を使い分けるのかなということなんです。われわれは、日常、いろんな人と付き合う時に、むしろ無表情な顔を作ることが心掛けていますね。つまり相手と関係性を持ちたくない、持つことが失礼かもしれないし、今はその時ではないっていう時には、相手とできるだけ表情を合わせないように努力すると思うんですよ。例えば、満員電車の中でね、いろいろ目が合っちゃった。そこで、関係性を作りたくないから知らん顔をして、にっこり笑ったりしないでしょ。そう努力してやらないと、これだけ過密に付き合いを持たざるをえない都市生活の中では、障害が出てきてしまいますからね、

吉川

多分、日本と欧米の違いってというのは、日本人は、やはり基本的に心理的距離が近いところで生活しているんだと思うんですね。だから、必要以上にあまりニコニコしないというやり方で、パーソナルスペースを守っているんだと思いますね。欧米では、エレベーターで人と乗り合わせた時、必ず一言二言話をする。そうしないと、とても緊張した変な空間になってしまう。欧米人は日本に来た時、誰もそういうことしないのでとても戸惑うようなんですが、日本人は、普段非常に近い対人距離の中で生活をしているので、必要ないんですね。むしろ、エレベーターの中って非常に近いので、むしろ無表情でやり過ごす。ただ、日本人って、欧米のホテルに行ったらエレベーターに乗ると、不思議にやりとりできるんですね。結構、コンテキスト（状況）によって使い分けている。

堀場

吉川さんのスピーチで、携帯やメールとかの発展で、フェイストゥフェイスなど、コミュニケーションの大事な部分がなくなっているというお話があったのですが、メールの効用というものを最近感じる場合があります。講演を聞いてくれた人は、言葉で、「いいですね、素晴らしい話」だといってきて、昔だったらそれで終わっていたんですが、次にその人からメールがきたので見てみると、その素晴らしかったところというのは、ぼくの思っているところと全然違う。メールで書いてきたから、その人の理解度というものがわかったんです。また、新入社員にぼくのスピーチを400字のアブストラクトにさせてメールで送らせるのですが、それでも、何を聞いてたかよくわかる。相手の理解の具合、また、こちらの伝え方の問題が明らかになるということでもあるんですが、結構、メールの効用というものを感じているんです。口頭で聞くだけではわからないです。

山極

確かに、若い人とのコミュニケーションの壁というのはありますね。さっきの吉川さんの最後の方の話であった、作業療法のことで出てきたことは、とても重要だと思いました。それは、ベテランの療法士は、子どもに対して語りかけながら、実はお母さんを非常によく気にしている。われわれが、バーとかでやることとシチュエーションがよく似ているんです。ママさんにいろいろ訴えかけながら、実は本当に伝えたいのはこっちにいる人でね。そういう第三者を常に介しながら、われわれは、大事なことを伝え合っているんじゃないのかなということを感じていたんです。直接



向かい合って話をするのではなくて、第三者でワンクッションおいて重要なことをいっているという場面を結構たくさん作っているんじゃないか。

堀場

それはぼくも絶対そうや。ちょっとノータリンがいますわな。なにかミスをした時、これを直接叱っても全然ダメなんやね。一緒に上司を呼んで、この上司を徹底的に叱るんです。これが一番効くんや。自分の失敗で上司がこれだけ叱られるんやとわかり、この時初めてことの重大さを理解し反省するんやね。ワンクッションというのはものすごくいい。

山極

これも共感のうまい利用の仕方ですね。要するに、部下は上司が叱られるのを見ていて、怒られているのは自分の責任やと思うんでしょ。そう思うからこそ、伝わってくるんですね。また、それがわかっているから、上司は黙って叱られている。

堀場

まあ、確かに後で、なんでそれだけ叱ったかわかってるやろな、と本人がいなくなっから、そのことを上司には説明しとかんといけませんけどね。

高杉 政一（ケービデバイス社長）

ちょっと質問します。作業療法の中で、何でお母さんが一緒におられるかというのが疑問なんです。子どもが誰に向かって話をしているかというとお母さんなんですね。私、何回か里親とか職親をやっているんですが、ほとんど、お母さんが子供の答えをいうたり、行動したりすることも見受けられんんですけど、作業療法でなぜお母さんを入れているのか知りたいんです。もうひとつ、



山口さんの「タメ口」についてです。私は京都で生まれて大阪で仕事をしているんですが、やはり距離感の問題だと思います。私が堀場さんに、「〇〇ちゃん」とかいうのは、ちょっとねということなんです。堀場さんから私が「〇〇ちゃん」と呼ばれたら、ものすごく親しみを感じてしまいます。タメ口は、距離感で使っている場合と悪い場合があるんです。これ、山口さんの、援護射撃をしたつもりなんですけど…。

吉川

えっと、多分ですね、作業療法士の方の認識として、子どもと一番長い時間一緒にいるのは家族、特に母親なんです。ですから、多くて1週間に1度、少ないと1カ月に1回と

いう貴重な1時間を、ああいう形で過ごすわけなんですけど、だから、多分その時にすごくたくさん情報を伝えたいんですよね。それは、子どもに直接伝える、これは体を通して、やりとりで伝わるんですけども、自分が発している言葉は、子どもだけに対するメッセージではなく、同時に母親に対するメッセージでもあるわけなんです。そうすると母親はこれを聞いて、家庭に帰ってから子どもとのやり取りの中で、それを応用することができるんです。これは、作業療法に来ている母親がそういうことをいっているんです。作業療法で子どもが楽しく遊んでいることを見るだけでも、母親にとってもものすごい励みになるんですね。何ととっても、学校などでは遊べない子どもなんです。1時間の間、子どもがとても楽しそうに遊んでいる。それをしっかり受け止めるプロがいて、その言葉のかけ方はとても参考になると、おっしゃっているんです。

高杉

ちょっと、私のいい方がまずかったんですが、子どもの反応がどうかということで、実は療法士を向いているのではなく、お母さんを見ながら反応したがるんじゃないかということを感じているので、そのことを聞きたかったんです。

吉川

それは、恐らく未熟な作業療法士の方が相手をした場合にはあることかもしれません。その場の中で、誰が一番ドミナントな人であるかということが大事なんだろうと思うんですね。で、あの作業療法士の方は、とても経験豊富で、お母さんもとても彼を尊敬していて、作業療法士がどういうことを子どもに対してするのかを見ながら学んでいる状況なんです。これがもし、経験の浅い、お母さんから見て不安を感じるような未熟な療法士が子どもの相手をしているとなると、その場の力関係が変わってきてですね、子どもは親を気にするようになるかもしれません。だから、そこは、ダイナミクス—その場にどういう人たちがいて、その間にどんな立場上の関係が動いているか—がとても大きいと思います。たまたま今回のケースでは、作業療法士の方が、ある意味で場を動かしているキーパーソンになっている。そこが、とても大事なことだろうと思います。だから、子どもは完全に作業療法士の人を見ています。

山極

発達障害のことが出てきたので、花園大学の渡辺実先生がせつかくお見えになっていますので、ちょっと聞いてみたいと思います。



渡辺 実（花園大学社会福祉学部教授）

あの、すごく大事な問題だと思います。吉川先生がおっしゃったように、療育については最近、ペアレントトレーニングとかですね、いろんな形で、お母さんにわかってもらおうと、特に、こういうお子さんの場合は母子関係があまりうまくないということが多いので、ベテランの先生はそういうことを気にされ、あえてこうした形をとっていらっしゃるのかもしれませんが。吉川先生もいわれたように、一番いい先生は、やはり親なんですね。そこで、親にいろんなことをわかってもらって、親子関係をもう一度構築し直してもらおうということで、あえてそういうことをされているということも考えられます。子どもさんの側も気にしていて、見ているんですね。ベテランと若い療法士の関わりの仕方など見ていて、お母さんがどういう態度をとっていくかで自分も変わっていく。吉川先生のおっしゃった通り、その場のダイナミクスの中で動いていくんだと思います。こういう場面は非常に難しいと思いますが、大事なことは、読み取ってくれる人がどういう人かということで、子どもの側にしたら、先生が自分の思いを読み取って代弁をしてくれている、と感じられることが大事。そして、お母さんとしては、そこがなかなか読み取れないので、子どもがどういう思いをしているか、先生から伝えてもらうことは、うれしいことなんですね。



それと、もう一ついうと、この子たちは家とかで親御さんとこれだけ喜んで遊ぶ場面はないんですね。こういうところで、目の前でこんなに喜んで遊んでいる姿を見て、そして、そういうことを親としても一緒にやってみたい、と、思う。そうなれば、作業療法士としても成功なんだろうと思います。

山口

関連してうかがいたいのですが、お父さんの役割はどうなんだろう。お父さんといえば、こないだの山極さんの、子どものゴリラがでっかいシルバーバックの周りで遊んでいる情景を思い出します。あれって、多分、理想的なクラス＝学級の姿に似ていますよね。それで、ふと思いついたのは、学級崩壊しているところは、お父さん性が消えているんじゃないか。学級崩壊しているところは、母性はあっても父性が足りないし、学級が成立しているところは、やっぱりお父さんがいるなあという感じがするんです。これ、行動心理学というのか、そういうものでできるかと考えるんですが、学級で一人一人の子どもの表情とか仕草を見て、先生との共感関係があるかを測定する。すると、学級崩壊しそうになっているクラスの全体の仕草の表情がわかってきて、それは、もしかすると先生のお父さん性に関係してるんじゃないかと思うんですが、どうでしょう。

吉川

お父さん性というのは、ほんとに大事ですが、難しいなあと同時に思っているんですね。あのゴリラは「パパジャンティ (papa gentil)」という名前がついているんですね。ジャンティというのは「優しい」という意味なんですけど、優しいだけのお父さんかというところ決してそうではなくて、とても強いお父さんに、優しいという属性がプラスアルファで加わっているんですね。名前には、ジャンティだけで、しっかりした、頼りになる、強い、自分たちを守ってくれる、動じないお父さんであるってことは、言葉には表現されていないけれども、そのことは、みんなにベースとして共有されてあるんです。学級という集団の中で、大きな声で指示をしたり、生徒の声を聞かない態度の先生がいたりした時、一見強そうに見えるかもしれないけれども、恐らくとてもパパジャンティではないですよ。では、どうすれば、そういう場ができるのか、ということに関しては、こうすればこうなるというふうにはいえないところがあるので、まだ、これからの課題なんです。山極先生どうですか。

山極

さっきの話でいえば、堀場さんのいったことそのままなんです。「にっこり笑ってダメ」という。オスのゴリラは、子どもたちを嫌いではない、愛しているんだけど、「ダメなものはダメだ」と壁になるんですよ。これで、ルール、規則、生きるために必要なことを子どもたちはおぼえていく。絶対、お父さんの「ダメ」が必要なんです。ところが、お母さんはダメっていても、「甘えられる存在」なので、ダメにならないんですよ。そこが、お父さんとお母さんの役割の違いだと思うんですね。



吉川

お父さんの役割をするお父さんが、日本には、なかなかいないような気がするんですが。

山極

だからこそね、地域社会というのが必要なんです。ゴリラのようにすごい体力を持っていて、常に、倫理と論理を体現するような存在に、人間のお父さんはなれませんから、それを地域で協力してやっていくことなんだと思うんです。この前にもいいましたが、相反する二つの論理—お返しを期待しない奉仕の関係、これは家族ですが、しかし、家族も外にできれば、きちんとお返しをし合わなければならない、対等な付き合いのためにはルー

ルを守らなければならない—これを、両方共わかって生きていくのが人間であって、これを子供たちに教えなければならない。これは地域がやっていたのだけれど、今それが弱くなっているんだと思います。

吉川

最近の変化なんですけど、大事なものが消えていっているなあと思うものに、いとことかおじさんとかおばさんとかの存在があります。つながっているんだけど、ちょっと家族より距離のある他者という存在が、以前は、ルールを教えたり、親が言えないことを伝える役割を果たしていたと思うんです。こういう中間の距離の他者という人たちは、人間のいろんな意味で教育者の役割をしたり、親が「表」しかいえない時、「裏」の論理を教えてくれたり、山極さんがおっしゃった地域社会のような役割も果たすなど、二つの側面からなっている世の中の、大事な要素のうちの片一方を担う役割を持っていたような気がするんですよ。こういったつながりがなくなり、地域社会の力も弱くなってしまい、表の論理ばかり、あるいは、裏の論理ばかりで単純に物事を理解するような、そういう浅いというか、シンプルな考えでしか人のことがわからないような社会になってきているのかなあと思っています。さっき堀場さんがおっしゃった「ニコリ笑ってバツサリ斬る」みたいな相反するような二つが同時につたわることが大事なんだろうけれども、今は、その一方だけしか伝えられないという状況になっているので、だからコミュニケーションがうまくいかなくなっているのかなという気がしています。

山口

私、パパジャンティ、という言葉にとっても触発されたんですけど、フランスにいた時、日常生活の中で「merci beaucoup」と「tres gentil」という4単語を、必ず、1日、5回は使います。「tres gentil」っていう言葉がひとつ評価軸になっているんですね。特に男に対して使うんですが、フランス社会、ヨーロッパは、基本的にお父さん社会で、お父さんなんだけど「優しい」と、これ、フランス社会をより上手に表現しているなあと思います。英語国民は「very kind」とはいうけれど「very gentle」とは言わない。そして日本には、どちらにも当たる表現がないですね。

山極

「merci」で思い出しましたが、昨今、コンビニで気になるのは、「おおきにどうもありがとうございます」だったかな、なんだか丁寧すぎてどうも、と思うことが多いですね。やっぱり、営業の人はご苦労だと思うんですが、今の日本人のコミュニケーションの仕方が変わってきたことと、地域の違いをどう考慮して相手と当たったらいいのか。モデルがないんですよ。その時に何を指標にしたらいいのか。多分、フランス社会もアングロサクソンの社会も変わってきていると思うんですが…。フロアから何かありますでしょうか。

谷本 親伯（大阪大学名誉教授）

沈黙もコミュニケーションだというお話で思い出したことがあります。私が、アメリカにいた時、コーリン・パウエル元国務長官の話を直接聞く機会があったんですね。冷戦たけなわだったんですが、旧ソ連のゴルバチョフさんが米国にラブコールを送ってきて、レーガン大統領がそれに応えようとする時、パウエルさんが、それを特使として対応するんです。それでモスクワでゴルバチョフさんに会う



と、大統領が全然応えてこなかったということで顔を真っ赤にして怒っている。それで、10分間も沈黙が続いたというんです。その後、突然笑い出し、それから、トントン拍子で話は進んだということでした。それで、ちょっと変に飛躍したことを聞くかもしれませんが、今日の中のやりとりのことなんですけど、集団のコミュニケーションはどうやったらいいんでしょうか。個人の場合には、ああいう作業療法で改善を目指すわけですが、日中は、今、集団と集団のコミュニケーションがどこかで、これが大きく狂っていると思うんですよね。このコミュニケーションの状態を改善していくには、どういう方法があるでしょう。

山極

これ多分、われわれのアイデンティティの問題だと思うんですね。相手を認めて話をする時、今ある出来事を抜きにして、全く白紙で接することはできない。これ人間の特徴で、相手の素性がわからないでは話ができないというのと一緒です。その素性の中に、今ある敵対関係とか自分が関与していなくても、そういうものが前提になってしまう。これは抜きがたいものです。多分これを避けては、人間は通れないと思いますね。私とあなたは日本人と中国人であるけれども、そうではない私とあなただと納得するには、時間があるんです。そのためには、お互いが近づかなくちゃいけない。さっきの、パウエルさんの話もそうで、沈黙と怒りの時というのは、お互いがわかり合える所まで上り詰めるための時間だったと思いますね。そこで新しい、お互い背負っているものを乗り越えて話ができる間柄になって、笑えたのではないかな。勝手な解釈かもしれませんが…。

谷本

それを可能にするのは、何なのでしょう。

山極

それは、ちょっとわからない。これは、吉川さんに聞きたい。私も同じような経験をし

たことがあるんです。

吉川

10分間沈黙をできたパウエルさんの胆力ってすごいんだと思うんですよ。ゴルバチョフさんは、自分がものすごい怒りを表現していることはわかっていますよね、それに対して相手がどう出るかというのを見た時に、逃げもせず抗弁もせず、沈黙を耐えたわけですね。10分も。その時、自分の思いが、はじけたんじゃないかと思います。ものすごい怒りがその10分間で、相手に受け入れられたという確信があったんじゃないか。想像ですけど。これがパウエルさんでなく、ちょっと例えば言葉で物事を解決するようなタイプの人が行っていたら、こうはならず、もっと怒りは大きくなっていったんじゃないかと思うんです。

山極

私の似たような経験というのは、ガボンでのことです。私たちがやっているプロジェクトに対してすごく大臣が怒って、そうですね、20分ぐらい怒り続けていました。こりゃ、説明調でも、喧嘩腰でも話をしたら多分ダメだろうと思い黙って待った。それで、その大臣が黙ったところで、こんな苦勞を私たちもしてきたんですと話しかけたら、何と、すごくわかってくれたんです。JICAの人は、最初ハラハラしていましたが、私は、言葉を完全に理解したわけではないけど、怒っている様子から見て、これは大丈夫だな。計画をぶち壊しにするような人ではないなということがわかったんです。それは、感じるものだと思うし、吉川さんが、パウエルさんは我慢したねといったのは、パウエルさんも大丈夫だと感じてわかっていたんじゃないかな。

谷本

瞬間的な会話でも、すごくコミュニケーションできたという満足感が得られることがあるじゃないですか。それはいったい何かということなんですが、それはインテリジェンスの問題、あるいは文化の問題かもしれない。そこで、最近の大学生が会話を保てないというのは、やっぱりある意味でインテリジェンスの問題があるんじゃないか。私も含め、大学がインテリジェンスを高めようというふうな意識を強くお持ちになっているのかな、と。私は、やっていこうと思っているのですが…。

山極

それもインテリジェンスですよ。そういうことを理解し、そういうものをみんなが取り入れて行くのもインテリジェンスです。今そういった教養というものがきちんと身につけていない。それが、うまく大学では伝えられていない。

谷本

でもわれわれ、大学で教えているじゃないですか。

山極

それをいわれると、ちょっと辛い。

塩田

大学の先生自身に問題がある。

吉川

教育ってほんとうに何だろうかと思うんですが、例えばブータンみたいな国に行きますと、まだ発展途上だし、日本の方が便利だし、優れたところもいっぱいあるんですが、ここには学ぶことがたくさんあると最初に行った時、感じたのです。しかし、帰ってきた時、それを理解するのはとても難しい、伝えることは今でも難しいと思うので、たくさん行ってもらおうという方針に切り替えたんです。それで、教育というのは何かと考えた時、不思議なもので、学生は、教えようと思ったことはあまり覚えてくれないんですね。教える方の意図とは関係なく、教えようと思っていないのに、学生たちはいろいろな場面で語ったことなど、いろいろな話からいろいろなことを学んでいるんです。こういうことを教えたいと、一生懸命やることはもちろん重要だけれど、あとは、教わる側に対する信頼しかないと思うんですよ。日本からたくさん人がきて国を歩き回るのは、ブータンの人々にとっては迷惑かもしれないけれども、そこに行くことでわれわれがたくさん学ばせてもらっているんだということがあれば、寛容に辛抱して見せてくれる。それに対して、われわれは何のお返しができるかという、逆に向こうの人たちを日本に呼んで、ネガティブなものも含めて、何でも学んでもらうことだと思うんです。教育は学ぶ側が主導権を持っているものなんだと考えるのです。



堀場

ブータンで一番感じ入ったことは何だったの。

吉川

一番ショックを受けたのは、子供がみんな元気がかわいいということでした。あと、お年寄りがとてもゆったりといい感じで暮らしているということですね。ほかのアジアのいろんな国に行くと、ここはとても子どもが暮らしにくそうだし、ここで年をとるのは大変だなと思うことが多い。でも、ブータンは、全く違います。小学校に通う子どもの姿、学

んでいる姿、お寺にいるお年寄りの佇まいというのが、非常に羨ましいと思いました。

堀場

それはなぜなの。

吉川

それはわからないんです。そこが一番知りたいところで、なぜ、ほかのアジアでできていないことがブータンではできているのか。ネパールとかとは様子が全然違う。不思議なところで、なぜか知りたいところなんです。子どもたちは往復4時間もかけて学校に通うんです。こんなエネルギーを与える国は、すごい力があるわけで、日本にとっても大変参考になると思います。

堀場

でも、なぜかわからなかったら、へーすごいなあ、と驚いて帰って来るだけになるんじゃないですか。

吉川

いや、いくつか仮説はあるんですよ。なんといっても仏教国で、ブータンで一番祈らないのは大学生なんですけど、それでも1日30分は祈る。お坊さんは10時間も祈る。これは統計でわかっています。お年寄りの生活も祈りを中心に構成されている。輪廻転生、自分の来世を信じているし、動物を大変大事にするんですね。いじめるとあれはあなたのおじいさんかもしれない、と叱る。そういう社会なんです。このように、ブータンのすごさの理由はどこにあるのか、推測ですがいくつか思い当たるものはあるんです。

山極

どうも話はつきそうにありませんが。ここらで、ワールドカフェに移りたいと思います。それでテーマなんですけど、吉川さんの話に基づき、「人の付き合い」ということにしたいと思います。人の付き合いで困ったと思うことは何か、どういう付き合いがいいのか、それをもたらすためにどうしたらいいのかということで、どうでしょうか。

クオリア第9回

テーマ「無意味なものに意味がある～沈黙・同調・模倣とコミュニケーション」

最後は恒例のワールドカフェ、「人との付き合い」、「仕事の上での付き合い」「付き合いで考えさせられたこと」などについて話し合いました。今回は各テーブルのご意見番も報告者となっています。熱気のコもったワールドカフェの一端を楽しんでください。

▽第1テーブル報告者 渡辺 実（花園大学社会福祉学部教授）

山本 勝春（浄土宗西山深草派 僧侶）

人との付き合いで困ったこと、から話が始まりました。どういうことで困ったかということ、価値観の違いということでした。ある社長さんのお話なのですが、最近の若い社員は、事務職でいいと、将来の夢も語らない。これがずいぶん自分たちの世代と違うとおっしゃる。その理由は、人とぶつかるのが面倒だとか、終身雇用でなくなったので、人との深いコミュニケーションを持つことも必要ないと考えようになったからではないかということでした。それで、コミュニケーションとは何かということになったわけなのですが、コミュニケーションには一次的なコミュニケーションと二次的なコミュニケーションがある。一次的は、場の共有、同じ場所で同じことを経験することで気持ちを共感し合えるような関係のコミュニケーションで、例えば、レストランでカレーといえ、カレーを食べたいんだとわかる。二次的の方は、フォーマルな形で、きちんとどういうことかを説明しないとわかってもらえないような関係におけるコミュニケーションです。



まあ、いろいろなコミュニケーションの形があるということなのですが、最近では、フェースブックなど、一・五次元的なコミュニケーションも出てきていて、擬似的に一次的コミュニケーションの場を共有するということが行われているのではないかという意見もありました。それで、コミュニケーションは、どちらかという上滑りになることが多く、「コミュニオン（交わり）」という全体と全体との関わり、言葉以外のことすべても含めた付き合いが大事ではないかという話になりました。コミュニケーションは結局個人の技であり、付き合いで困ったことが起きても、ポジティブに考えれば解決していくのではないかという声もありました。

▽第2テーブル報告者 吉川左紀子（京都大学こころ未来研究センター長）

世代間のギャップということで話したことなんですが、私のところの院生が、教師として夜間の大学で心理学の講義をした時の苦労話です。40代、50代の、人生経験豊富な受講生を、20代後半と前半の教師が教えるというちょっと難しい状況の中で、院生は、後輩を支えて、辛い授業を乗り越えたというのです。人生の先輩といった年齢の人たちに心理学を教えるだけでもなかなか難しいことなんですが、自分も、大変苦労しながら、そんな中で後輩のアシスタントをサポートした。その話を聞いたとき、世代間で違うといわれているが、やっぱり辛さを引き受けながら、年下の人を支えるという気持ちは、変わらないんだなあ。若い世代は、自分たちとは違うように見えていられるけれども、自分が若かったときと同じように、人との付き合いを学んでいっているんだなあと思ったという話をしました。



こころの未来研究センターのことも話しました。いろいろないきさつがあって、全く違う分野の先生が4人集まって、新しい部局を作りたいということになったんですが、その時、わたしの中で一番大変だったのは、いろんな先生たちからいただいたアドバイスだったのです。良かれと思ってたくさんの方がアドバイスをしてくださったんですね。その中で最も多かったのは「小さいセンターなんだから、ひとつだけやりたいことを決めて、これだけはやりますというのがいい」というものでした。それで、最初の3年間、どうしたら4人の先生で一つの大きな柱をつくっていけるかということで、いろいろやってみたのですが、本当に大変でした。で、結論としては、そういう方針でいくのは諦めました。京大の4人の教授が全くそれまで学問上の共通項もなく生きてきた人たちで、しかも50代です。それが、突然集まって、何かひとつの共通の目標に向かって一緒に力を合わせるなんてことは、それはできません（笑い）。できることは、みんながそれぞれにやりたいことを目一杯やって、楽しい人生を過ごすということです。こう決めたのが4年目。そういう方針にかえてやったら、とてもいい感じでセンターの運営をできるようになったんです。で、先ほど、それでは、バラバラになったんじゃないかという質問があったんですけど、不思議なことに、「うちのセンターは、全員が好きなことができるセンターなんです」という共通項ができたんですね。私は楽になったし、先生方もハッピーになった。とても逆説的ですが、今はこれしかないと思っています。

谷本 親伯（大阪大学名誉教授）

留学生とどう付き合っているかで討論をしたことがあります。中国人が多いですが、日本で受けた親切は下心がなかった、とすごく日本をよく思っていて、その後いい関係が続いています。もう一つは、環太平洋大学連合の会合の時のことですが、留学生を多く交換

するにはどうしたらいいかという議論をして各大学がPRを行った時、現在の京都大学の総長の松本先生は「私は心を教えます」とおっしゃった。これピカイチでした。関西にはFMCOCOLOというのがある、阪神大震災の時、外国人、留学生たちへの外国語の情報が少なく困ったことでできた放送局ですが、あれ、西島（安則）先生も協力された。京都ははっきり心をいうんですね。ということで、人との付き合いは「心」だと。

▽第3 テーブル報告者 服部久美子（京都リサーチパーク産学公連携本部
統括マネージャー）

まず、コミュニケーションに求めるものということまで話をしました。それは、結局立場、によって違うんじゃないか。例えば、夫婦間、上司と部下、男女であるとか学生と先生の関係など、求めるものがそれぞれ違って、自分たちのしたいようにコミュニケーションはとられるが、それを埋める方法はいろいろあるんだろうが、その時、軸をぶらさないことでいろんな人とコミュニケーションを取ることができ、心を通わせることができるの



ではないかということが結論ということになりました。あ、それから、ガールズトークのように、いいたいことを一方的にいうだけという新しいものが出てきています。そうした新しいコミュニケーションのスタイルもコミュニケーションというのかという話も出て、いろいろ話した結果、最初の話で出たように、立場によって求めるものがそれぞれ違うので、そういう意味でコミュニケーションはとれているのかなという話になりました。

あと、学生と先生のコミュニケーションの仕方ということで、これは味方じゃないなという学生を、あえて味方につけに行くことで、場の全体を味方につけるという方法があるという意見もありました。最後に、上下関係しか考えられないような人とのコミュニケーションはギャップがなかなか埋まらないが、これも、自分の軸をぶらさないことで、周りから近づいて来て、うまくいくのではないかということに。

▽第4 テーブル報告者 山極寿一（京都大学大学院理学研究科教授）

女性の管理職の方がいらっしゃったので、男女共同参画の問題、特に管理職の立場からするとどうかという話をしました。男女の部下とどううまく折り合いをつけていけばいいか結構苦労があるようで、部下が女性の場合と男性の場合では付き合い方が違う。女性の場合は、いい職場を求める時に、身近な人との信頼関係が重要だと思っているし、自分が幸福になる大きな窓口だと考える。男性の場合には、より広い範囲の人に認めてもらいたいと思っているので、多少職場の雰囲気が悪くても、上の方の人に認められること、より広い評価を求めることを重視する。こういう違いが男女である。それから、男女共同参画に関して今の日本の方針については、男女の違いを前提にした平等性が担保されるべきであって、何もかも平等にやるというやり方については疑問だという声が、結構大きかったですね。



人間関係をうまくやっていく方法としては、いふなれば、いつも悪口をいってたりするようなことが、結構プラスにもなるという意見がありました。つまり、これ「不在の会話」といまして、噂話は人間の会話の殆どを占めるわけですね。人の噂をするというのは、その人がここにいることを認めているわけで、仲間はずれにしているわけではないですね。その人がいなくても、いることのようにみんなが思っている裏の証であって、それは実は重要なことなんじゃないか。噂話に乗らなくなったら、もう、見捨てられたと考えていい、と、これは私の意見です。もう一つ、グループを作るのに、例えば、女性を雇用する場合には、1人でもなく2人でもなく3人雇うのがいい。1人だと、全部上からの要望とか苦情を一身に受けなければならない。2人だと対立点が明確になりすぎる。それに対して3人いると、相互していろんなものが相殺されるという形になるので、そういう雇用の仕方がプラスという話も出ました。

男女共同参画に関連してですが、最近、女性が、男の領域と思われていたところに進出してきているのですが、ショー的イメージが強く出されていて、本質的に男と女が共同で折り合いをつけて行くためには、何らかの合意が必要。必ずしも、すべてを平等にすることではなく、男女の差を越えて声をかけ合うことが重要なんだろう。声をかけ合うことができるような関係を基に何か作っていくことが重要なんじゃないか。その上で距離感をきちんと把握すること。つまり、そういう距離感を基に相手との付き合い方を調節するというような感覚が大事なのではないかという話をしました。それで、これからどうしたらということなんですが、突然ですが、教育が大事ということで、まだ詰められていませんが、みんなが納得した次第です。

最後に、中田哲史(中央公論事業戦略本部長)から感想が…。



山極さんに呼ばれて東京からやってきました。中央公論に勤めておりますが、仕事柄、男女の比率は半分で、共同参画については区から表彰されたことがあります。いろいろ、企業にとっては負荷がかかるんですが、業務として編集は女性に向いていることもあり、もともとそれは織り込み済みです。いろんな業種でコミュニケーションのあり方とか、男女の評価や制度で働きやすい環境を作っているとか、男女の資質の違いを前提に共同参画をやっていくなど、大変、有意義な話を聞くことができ、ありがたかったです。

それから、この会の感想ですが、大学の先生や産業界の人が一緒になって話すということ、これは大変興味深いことで面白いと思いました。そして、これがまた文字に落とされているというのもいいですね。大変ユニークなものと思いました。